

Mac Employee Choice

サイボウズの「100人100通り」の働き方と 従業員選択制によるMac導入の価値

働き方の多様性を重んじるサイボウズでは、
業務に用いるパソコンを従業員自ら選ぶことが可能です。
最新世代の「M1 Mac」を標準機として採用し、
年々Macの利用者は増加しています。
従業員の幸福度を第一とした企業経営における
「Macを選ぶこと」の価値と魅力に迫ります。

サイボウズのワークスタイル変革と 従業員選択制のメリット

従業員は全員ワガママであれ

1997年の設立から一貫してチームワークを支えるソフトウェアを開発してきたサイボウズ株式会社（以下、サイボウズ）。業務改善に役立つアプリを簡単に作成できるクラウドサービスの「kintone」、企業全体の情報共有やコミュニケーションを促進して業務効率を高める中小規模向けの「サイボウズ Office」や大企業向けの「Garoon」といったグループウェアを提供することで広く知られています。

また、「チームワークあふれる社会を創る」という理念に基づき、ソフトウェア開発会社の枠を超えて、社会全体の働き方の変革や地方創生、起業家の支援など、多角的な視点から「日本のチームワーク」を高めるための事業にも積極的に取り組んでいます。昨年は、新型コロナウイルスで社会が不安に包まれる中、経営者に対してテレワーク推進を呼びかけた新聞広告やテレビCM「がんばるな、ニッポン。」が大きな波紋を呼びました。

そんなサイボウズでは、自らが実験台となるかのように、社会の見本となる新しいワークスタイルの構築にも挑戦してきました。2006年には最長6年間の育児・介護休暇制度、2010年には在宅勤務制度をいち早く採用し、2011年の東日本大震災の際は全社テレワークを実施。そして2018年には「100人いたら100通りの働き方」を目指し、一人ひとりのライフスタイルやライフステージの変化に合わせて自身の働き方を自由に決定でき

サイボウズ株式会社 代表取締役社長 青野慶久氏。先進的なワークスタイルを提唱し、日本における働き方改革をリードしています。



る新たな人事制度「働き方宣言制度」を導入しています。多様な働き方を推し進める理由として、同社代表取締役社長の青野慶久氏は次のように答えます。

「"会社は我慢するところ"というのが、昔の考え方だったと思います。でも、我慢してストレスを溜めながら仕事をして、給料をもらって憂さ晴らしをするというのは決して生産的ではありませんよね。また、我慢をさせればさせるほど、従業員が会社を辞める理由にもなります。たとえば、夜型の人に朝に無理矢理働かせてもパフォーマンスは上がらないでしょうから、一人ひとりに合わせた多様な働き方を認めたほうが生産性が上がり、幸福度も高まると思ったのです」

サイボウズでは離職率が28%と過去最高を記録した2005年以降に地道に組織の改革を行い、優秀な人材の採用や定着、個人ならびにチームの生産性の向上を目指して、人事制度や評価制度などを見直してきました。その結果、昨年の離職率はわずか2.7%に下落し、女性社員の割合も約45%にまで増えています。ともに日本のIT企業としては非常に異例な数字です。また、こうした取り組みが奏功して、サイボウズはGreat Place to Work® Institute Japanが実施する『日本における「働きがいのある会社」ランキング 中規模部門（従業員100－999人）』に8年連続ランクイン（2021年度版では2位）しています。

「サイボウズには、"ワガママは言うのが当たり前"という不思議なルールがあります。むしろ、言わないのは卑怯だと考えます。なぜなら、我慢されたら幸福度が落ちて生産性も下がるからです。営業の出先でスキマ時間にカフェで仕事するためのコーヒー代を出してくれ!といったようなリクエストもありますが(笑)、私利私欲のためではなく、それが仕事により影響を及ぼすのであれば投資対象だと考えます。『100人いたら100通りの働き方』はバラバラの個人を生むように思えるかもしれませんが、皆が目指しているのは『いいグループウェアを作り、世界へ広げること』1つであり、そのためには全員ワガママであっていいんです」(青野氏)

従業員選択制の自然な導入

このような多様性を受け入れる風土が根づくサイボウズで、当たり前のように採用している制度の1つに「企業端末の従業員選択制」(Employee Choice : 以下、従業員選択制)があります。これはビジネスを行ううえで不可欠であるパソコンなどの業務端末を従業員が選択できる制度を指し、とかくWindows PCを中心として構築されてきた日本企業の業務システムにおいては、Mac（またはiPadやiPhone、Androidなどのモバイルデバイスなど）も選択肢として加えることを意味します。

従業員選択制が注目されることになったのは、世界的なIT企業であるIBMが2015年に採用したことが大きなきっかけです。Macを選択肢に加えたことでWindows PCからの乗り換えが増え、従業員の満足度や定着率、生産性が向上しただけではなく、MacのほうがWindows PCと比べてコストやヘルプデスクの負担を削減できたことなどを調査レポートで明らかにしました。日本ではまだ珍しいものの、海外では従業員選択制を採用する企業は数年前から増加傾向にあり、Macの企業導入は着実に加速しています。

ここで重要なのは、従業員選択制は決して一過性のブームではないことです。「従業員の望む環境を整えること」は、それが従業員のモチベーションや生産性の向上、人材確保や定着化、ダイバーシティの推進につながり、ひいては企業の成長や競争力の強化へとつながると、多くの企業経営者が合理的に判断した結果です。

サイボウズでは現在の情報システム部が所属する運用本部を2014年に立ち上げたことに伴い、IT投資に関しても大きな見直しを図りました。従来の「節約志向、ローコストな情報インフラ」という"守りのIT投資"から、「100人いたら100通りの働き方」の実現を目指すために"攻めのIT投資"へと舵を切ったのです。そしてその過程で、海外の事例を真似るのではなく、従業員選択制の採用へ至ったのは自然の流れだったと言えます。

「変な言い方ですが、日本の企業はIT投資をケチっていると思います。全員に配るパソコンは低価格な製品で、メモリを少なめにするなど、下のラインに合わせています。その結果、たとえば経理の社員がExcelを開くのに30秒待たなければならないという状況があります。このパソコンなら気持ちよく働けます!と従業員が言うのであれば、それを使ってもらったほうがいいでしょう。我慢させてモチベーションを下げ、生産性を損なう必要がどこにあるのでしょうか。働き方を選択するように、働くときに使うデバイスも当たり前に従業員が選べるようにしておかないと、これからの若い人には支持されないでしょう」

青野氏はそう語り、従業員一人ひとりが最高のパフォーマンスを発揮できるかどうかは企業選択の理由になるだけでなく、長期的に見ると生産性の面でも大きな差が出ると言います。実際、サイボウズの売上高は組織改革が進んできた2011年の42億円から、2020年には156億円へと大きく上昇しています。



サイボウズの東京オフィスには、BAR（バル）やラウンジなどコミュニケーションのための場が至るところに設けられています。



ビジネスマーケティング本部 プロダクトブランディングチーム 吉原寿樹氏。従業員にとって「選択できること」は大きな価値だと語ります。

処理 & バッテリー性能に優れた M1 Macが企業導入に最適な理由

Macを選ぶ新入社員が圧倒的

サイボウズで働く従業員も選択制の価値を大いに感じています。

「当社で働いていると、選択肢の数が幸福度につながることを実感できます。たとえば、コロナ禍に出社を強制するのはよくないという風潮からテレワークが注目されていますが、全員がテレワークで幸せになるわけではありません。人によってはオフィスのほうが働きやすいこともあると思います。業務端末も同じです。Macのほうが使いやすい人もいれば、Windows PCが使いやすいという人もいます。大事なのはMacかWinかではなく、そこで『選べるかどうか』です。僕たちの仕事はパソコンを使うことや設定をすることではなく、価値をアウトプットすることだと思うので、Mac派なのにWindows PCに慣れる必要があるというのは生産性の観点からすごい時間のムダですよ」（ビジネスマーケティング本部 プロダクトブランディングチーム 吉原寿樹氏）

857名の従業員（2020年12月末 連結）を抱えるサイボウズの国内で導入している業務用パソコンは約2500台で、うち約700台がMacです。まだ半数には及んでいないものの、着実にMacを選択する従業員は増えていると同社情報システム部で業務用クライアントデバイスやアカウント管理、ヘルプデスクを担当する青木哲朗氏は言います。



運用本部 情報システム部 青木哲朗氏。同社における従業員選択制の採用を情報システム部の立場から積極的にサポートしています。



カスタマー本部 ファンコミュニティ推進部 村上沙綾香氏。「初めてのMac」に大きな戸惑いはなく、日常業務でも支障は全くないと語ります。

「Macを選ぶのはエンジニアが多かったのですが、今は社長の青野をはじめ、人事や営業などいろいろな職種の人が使っています。従業員選択制を採用して以来、サイボウズでは入社前に自分が使いたいパソコンを決定してもらうのですが、去年は新入社員37名のうちWindowsを選んだのは10人、今年は30名のうち1人だけでした。新入社員のMac選択率は3年前は3割程度だったので、近年はMacの人气が非常に高まっていますね。既存の社員も端末のリプレース時にMacへ切り替える人が多く、1年に20～30人ほどいます」

ここで特筆すべきなのは、これまでMacに使い慣れた人だけがMacを選んでいるわけではない点です。

「私の入社時は従業員選択制が導入されていなかったのでWindows PCだったのですが、3年前にMacへ切り替えました。大学生時代に卒論で使った程度のパソコン初心者だったものの、社内で使っている人も多かったのでMacを使ってみようかなと。kintoneやGaroonを使ったり、PowerPointでプレゼン資料を作ったり、最近ではIllustratorを使ってノベルティをデザインしたりしていますが、Macだからと言って困ることはまったくありません」(カスタマー本部 ファンコミュニティ推進部 村上沙綾香氏)

「学生時代はWindows PCを使っていたのですが、製品プロモーションの部署に

配属され、Macを使い始めました。今はWindowsでも良いのかもしれませんが、PhotoshopやIllustratorを使ったクリエイティブワークをすることもあって部署内で利用者が多かったこと、iPhoneを使っていたので興味もあったことがMacへスイッチした理由です。最初はWindowsとの挙動の違いを学習する必要はあったものの、今では何の問題もなく使いこなせています」(ビジネス・マーケティング本部 プロダクトブランディングチーム 吉原寿樹氏)

驚愕のM1 Macがスタンダード

2010年代からのクラウドツールの普及に伴い、業務で利用するアプリやサービスもOSやプラットフォームを問わずに利用できるようになったことから、Macを業務で利用する際の障壁はWindowsのみ対応の基幹システムや特殊なアプリを利用している以外ほとんどなくなりました。また、MicrosoftやAdobeをはじめとするビジネスで利用する主要なソフトにはMac版が存在し、Appleの専用アプリストアである「App Store」には仕事で使える豊富なツールが揃っています。サイボウズのように、モバイルデバイスとしてiPhoneも導入している企業においては、Appleデバイス同士だから可能な操作感や連携機能なども、Macを選択することの魅力でしょう。

また、Macの魅力は「ストレスがないこと」だと長年のユーザである青野氏は言います。「調べたり、考えたり、出力したり、コミュニケーションしたり、Macでしていることは珍しいことではありません。しかし、そうした一連の作業の中で、Macは思考のプロセスを妨げません。たとえば、指先で自然にクリックやスクロールができるトラックパッドがいい例ですね」

また、従来のIntel製CPUを搭載したMacからAppleが自社開発したシステムオンチップ(SOC)「M1」を搭載したMac(以下、M1 Mac)へ機種変更したときは、Macという

コロナ禍でビデオ会議が増えた昨今、処理能力が格段に向上したM1 Macは複数のアプリを起動してもファンが回ることなく、快適に動作します。



プラットフォームの魅力をさらに再認識したと言います。

「コロナ禍になって、Intel Macの動作が重く感じるようになったんです。長いときには1日7～8時間くらいビデオ会議をしていますので、Mac+外部ディスプレイで2～3画面立ち上げて、Zoomを起動しながらプレゼンをしたり、ブラウザでkintoneにアクセスして議事録を書いていたりと、以前の13インチのMacBook Proだとファンがずっと回り放しでした。でも、M1のMacBook Proに切り替えてからは格段に処理能力が上がっていて、快適に操作できます。ファンが回ることはまずありません」(青野氏)

M1 Macへと切り替えた従業員は「バッテリーの持ち」もM1 Macの大きなメリットの1つとして挙げます。

「最近是在宅ワークが多いので、たまにカフェで仕事をするときがあります。M1 Macを使い始めてからはバッテリーの持ちが非常にいいので、家である程度充電しておけば1日中使えます。以前は、電源アダプタを持ち歩いて電源コンセントのあるカフェを探さなければならなかったのですが、今ではどんなカフェでも仕事ができます」(村上氏)

2020年11月に発売開始されたM1 Mac (MacBook Air & MacBook Pro) は従来のIntel Macと比較して最大3.5倍高速なCPU & 最大6倍高速なGPUを備えながら、省電力に優れた高効率コアにより従来比最大2倍長いバッテリー駆動時間を実現したことで大きな話題となりました。Appleによると、その性能はエントリーモデルのMacBook Airでさえ「過去1年間に販売されたWindowsノートパソコンの98パーセントが搭載しているチップよりも高速」。サイボウズではそんな次世代のMac (MacBook Pro 13インチ) を、2021年3月からいち早く業務端末として標準採用しています。

情報システム部でも業務マシンとしてのM1 Macを高く評価しています。

「CPUが異なるので単純比較できませんが、同じ値段のWindows PCと比べてもサクサクと動きます。バッテリーの持ちもいいですし、液晶ディスプレイもきれいです。企業導入するうえでMacの価格は高いというイメージがありますが、M1 Macは非常にコストパフォーマンスに優れたマシンだと思います」(青木氏)

しかも、サイボウズではM1 Macのメモリを標準の8GBから16GBへとアップグレード。従業員に最高の環境で仕事をしてもらえるようスペックの高いマシンを使ってもらいたいという思いからです。また、エンジニアなどより画面の大きなMacを好む場合は16インチのIntel Macbook Pro (メモリ32GB、ストレージ512GB) を、デスクトップマシンを好む場合はiMacも配付しています。ここまで従業員に対して、手厚くサポートするのはなぜなのでしょう？

「当社の情報システム部では『誰でも、いつでも、どこでも、最高の仕事ができる情報システムを作る』をミッションに掲げています。ですから、100人100通りの働き方を実現するうえで、従業員選択制によってMacを選べる環境を構築するのは当然なことだと思っています。仕事で使うパソコンは私たちが選ぶのではなく、社員の方が選ぶべきです。また、特にコロナ禍の今は在宅ワークの人が多いですが、たまにオフィスに出社して働いたり、働く時間も場所も一人ひとりバラバラです。しかし、そうした状況であっても、一人ひとりが最高の仕事のパフォーマンスを発揮できるように支えることが私達の仕事なのです」(青木氏)

Jamf Pro導入の効果と 情報システム部の在り方

ゼロタッチデプロイの破壊力

Macを企業導入するうえでは「管理が難しそう」というイメージが今でもつきまといます。また、Macに不慣れな企業であれば管理・運用スキルの習得や、慣れない管理ゆえのセキュリティリスクなども不安材料に挙がるでしょう。そこでサイボウズの情報システム部にMacの管理は大変なのか?と尋ねてみたところ意外な答えが返ってきました。

「もちろんMac導入当初はいろいろと勉強しましたが、私個人の見解では、Windows PC同等またはそれ以上にMacの管理は楽だと思っています。特に昨年からMac用のMDMとしてJamf Proを使い始めてからは管理が大変楽になりました」(青木氏)

特に効果的だったと語るのは、Jamf Proによる「ゼロタッチデプロイ」の実現です。企業において大量のパソコンを導入する際は会社のポリシーに準じて端末に必要な設定やアプリのインストールなどを行う必要がありますが、端末が多くなればなるほど、開封作業や設定には時間がかかり、情報システム部の大きな負担となります。そうした初期設定の手間を大幅に軽減してくれるのがゼロタッチデプロイという仕組みです。

「あらかじめJamf Proで構成プロファイルなどの設定を作成しておくだけで済むので非常に簡単です。あとは、パッケージを開封していないMacを箱のまま従業員に渡すだけ。従業員が開封してネットワークに接続された瞬間に必要な設定が自動で端末に適用されてJamf Proの管理化に入るので本当に手間いらずです」(青木氏)

実際にゼロタッチデプロイを経験した従業員に話を聞くと、「kintone上で公開されているマニュアルを見ながら、ポチポチと押していくだけで判断に迷わず設定できました」(村上氏)。「プライベートのMacでもそれなりの時間がかかるので、業務用のMacはもっと大変だと思っていましたが、30分ほどでできました。僕たちの仕事はパソコンをセットアップすることではないので、そこにかかる時間を減らせるのは素晴らしいことです」(吉原氏)。



ゼロタッチデプロイを実現したことで、情報システム部の負担は削減しました。Macのパッケージを開封することなく従業員に手渡します。

また、経営者の立場から青野氏はゼロタッチデプロイに関して次のように語ります。

「私もMacを使っていますが、これまでは情報システム部に迷惑かけているかもしれないという後ろめたさのようなものがありました。ビジネスではWindows PCが標準なので、Windowsのほうが管理ツールも揃っているだろうから申

し訳ないと。ところが、Jamf Proを使い始めたことで、Appleデバイスでも普通に端末のキittingや日々の運用管理を行えることがわかり、とても安心しました」

サイボウズではMacはJamf Proで、Windows PCは「Microsoft Intune」で、プラットフォームごとに別々のMDMを使って端末管理を行っています。以前はWindows PCもMacも、iPhoneも、Androidも管理できる統合型のMDMを使っていたそうですが、それぞれのプラットフォーム専用のMDMで別々に管理したほうが楽だと言います。

「1つのMDMで管理したとしても、結局はWindows PC用、Mac用と2つの設定を作らないといけませんので、管理工数や手間はそれぞれ別々のMDMで管理していても変わりません。よって、それぞれよりスムーズに使える最適なMDMを選んだほうがいいと思います」(青木氏)

Macの場合はOSのアップデートが頻繁にあるため、以前のMDMだとアップデート後に期待した動作をしないことがあったと言います。その点、Jamf ProはAppleデバイス専用のMDMとして高いシェアを誇り、OSアップデート時に同日サポートするため安心して使えます。また、Jamf Proは独自の「Jamf エージェント」と呼ばれる機能によって、一般的なMDMでは対応していないシステムレベルのタスクを実行できるなど、きめ細かな管理ができることも強みだと語ります。

「たとえば、設定やアプリを端末に送り込むときに、管理者が意図したタイミングや頻度で繰り返したり、『スマートグループ』という機能で端末を柔軟にグルーピングできたり、本当にかゆいところに手が届く設定が充実しています」(青木氏)

愛されまくる情報システム部

サイボウズの情報システム部では、企業における情報システム部の役割はパソコンのセットアップや管理ではなく、従業員のパフォーマンスひいては企業の経営に大きな影響を与えることだと認識しています。そのため、Macの管理が楽になったことで新たに生まれた時間を、パソコンのセットアップ以外の従業員からのリクエストに費やせるようになったのも、Jamf Proを導入したメリットだと言います。

「バックオフィス部門にはお金をかけない企業も多いと思います。しかし、当社ではバックオフィス部門も会社を支える大事なビジネスインフラとして捉え、社長を含む経営陣と



Macのセットアップにかかる時間はほんのわずか。従業員の貴重な時間を奪わない点もゼロタッチデプロイの魅力です。

合意して戦略的に投資を行っています。情報システム部だけでなく、人事などのほかのバックオフィス部門が先進的な事例としてメディアで取り上げられることが多いのは、そうしたバックボーンがあるからなのです」

青野氏は、サイボウズでは「情報システム部の在り方」が一般的な企業とは大きく異なると述べます。

「一般的に情報システム部は、規制して統制することが仕事だと考えられていますよね。ITトラブルが生じるとリスクにつながるのでルールを策定して、従業員に与えて管理するといったように。犬を犬小屋に鎖でつないでおくようなイメージです。その一方で、当社の場合は『放牧』です。柵はとりあえず作ったので、あとはご自由にしてくださいというスタンスで、どんどん柵は広がっていく。だから、従業員からの『愛され度』が違います」

サイボウズでは毎年年末にその年にお世話になった人やチームを投票して上位者を表彰する「サイボウズオブザイヤー」を開催しています。このイベントで、情報システム部はほぼ毎年のように表彰されると言います。

情報システム部が愛される存在であることは、従業員のコメントからも感じ取れます。

「情報システム部に対しては、そんなにワガママを聞いて大丈夫なのかとたまに心配になるくらいです(笑)。従業員選択制でパソコンを選べることだって、管理する立場としてはOSや機種が統一されていたほうが楽なはずなのに。また、パソコンのアダプタのようなアクセサリ類だって頼めば本当にすぐに貸してくれるなど、とにかくレスポンスが早いのです。情報システム部の在り方は、働き方に本当に直結していることがわかります」(吉原氏)

サイボウズの情報システム部では、たとえば在宅勤務で利用するヘッドセットやイヤホンが欲しいというリクエストがあれば、kintoneからリクエストを受けつけたあと2～3日ですぐに手配しています。このように自ら掲げたミッションを忠実に遂行し、決して簡単ではない「100人いたら100通りの働き方」をサポートして従業員が働きやすい環境で働いているからこそ、年末には「自分の好き勝手をさせてくれてありがとう!」といった感謝が返ってくるのです。

現在の企業活動において、ITはどんな職場にでも必要不可欠なもの。従業員すべてがお世話になっているからこそ、「それはだめ、これもできない」が常套句となりがちな"嫌われもの"ではなく、サイボウズのように"愛されまくる"ことが、これからの情報システム部の新しいカタチと言えそうです。



サイボウズの情報システム部ではMacの管理にJamf Proを用いています。Macの管理は決して大変ではなく、Windows PC同等に楽に行えると言います。

従業員の幸福度につながる 「選べること」の価値

個人の幸福度こそ最優先に

2019年4月に施行された「働き方改革」を引き金に、昨今では労働時間の短縮や有給休暇義務化、ワークライフバランスの充実など、個人の働きやすさを高めようとする努力を多くの企業が行っています。従業員の多様性を重んじて一人ひとりが働きやすい環境を構築し、生産性を高めるためのワークスタイルの変革には多くの人が賛同するでしょう。しかし、一方では企業側が形だけの制度を導入したことで、「労働時間や給料が減らされ、生産性は上がらないのに、これまで以上の成果を求められる」ことになった働き手も少なくありません。

ワークスタイルの変革へのアプローチは企業によってさまざまですが、サイボウズの実践例で素晴らしいのは、さまざまな制度が従業員側のリクエストに答える形で出来上がっていった点です。サイボウズではkintoneで活発に社内コミュニケーションが行われており、そこへ意見を書き込めば皆が閲覧できる状態になっているそうです。そして、一個人の意見が反響を呼ぶと同僚だけでなく、人事や法務、情報システム部といったセクションリズムを飛び越えて拡散し、制度化へと向かって動いていく。まさに同社が目指す「チームワークあふれる社会」が社内に形成されているのです。情報システム部が「愛されまくっている」こともその1つの証でしょう。

真のワークスタイルの変革は企業側の努力だけで実現することはありません。従業員選択制を例にすれば、もしあなたがMacのほうが生産性が上がると感じているならば、今Windows PCを使って生産性を下げていることに問題意識を感じ、「Macを使いたい!」というワガママを言うことがこれからの時代には大切なかもしれません。サイボウズで「個人の幸福度を高める」という目的から誕生した制度が、結果的に同じチームで働く従業員の「選べることが幸せ」に結びついたように、多様性溢れるこれからの時代には個の意見とそれに真摯に耳を傾ける企業にこそ本当の価値があるのです。